

白血病児の保護者の心理過程に関する研究

— 臨終前日の母親との面接を通して —

(分担研究: Death Education に関する研究)

中澤眞平、相原正男、大塚由美子

要約：白血病児の保護者と医療関係者が共通の喪失体験から悲嘆への対応を学び、今後の死への正しい理解を深めるために、発病時から臨終前日まで患児と接してきた母親と面接を行った。心理面接を受けることに対する母親の戸惑いが当初見られたが、傾聴していくうちに患児との内面的な繋がりがもてたことを語り続けてくれた。心理面接を通して保護者と医療関係者が身近な存在としてお互いを認識することが、患児の死への共通理解を深めるものと思われた。

見出し語：小児白血病、保護者、医療関係者、心理面接

【はじめに】

Death Education とは、安らかな死を迎える方法を学ぶことでも、安楽死の方法を含め死の準備をしていくことでもない。だれでも平等におとずれる不可避の「死」という事実を介在させながら、人間理解を進める相互学習のことであり、そこには自らとは違う「他」の存在を思いやる感性の陶冶といったことも含まれるという。不治の病をもつ患者とくに患児のターミナル・ケアは、家族と協力しながら進めなければならない。家族が心身ともに安定しなければ、患児へのターミナル・ケアは十分に機能することはできない。一方、

病名を告知された時の両親の予期悲嘆、初回導入時での悲嘆の受入れと病気への挑戦、再発時の将来への絶望、再発・寛解のくりかえしによる不安と動揺、そして同様な経過を辿った他児の死を通してのあきらめ、さらに患児の死後残された両親の喪失体験とそれに伴う悲嘆のプロセスが、経験のある医療従事者なら容易に想像されるが、生物学的にあってはならない「子供の死」を経験した両親の心理過程はそれぞれの環境により同一なものではないと思われる。死にゆく患児の両親に最も手をさしのべられるのは、医師、看護婦、心理療法士と、親族、友人であろう。そのた

山梨医科大学小児科学教室：Department of Pediatrics, Yamanashi Medical College

めに、医療関係者が「Death Education」を受けて、死への正しい理解と学際的な研修を重ねて、精神的に苦慮している両親、残された家族への対応を模索していかなければならない。そこで今回は患児の臨終前日に母親と面接して、発病時から現在まで患児と接してきた心理的軌跡、医療従事者への要望、さらに心理careの必要性等に関して話し合いがもたれたので報告する。

『患者紹介』

父方祖父母、39歳の父と38歳の母、11歳の弟の6人家族で、15歳時に急性リンパ性白血病を発症。本人には骨髄機能が低下しているため骨髄の働きを助ける治療をすると説明し、本人も納得して治療に対してきわめて協力的であった。1カ月後完全寛解を確認し、以後治療は予定どおりに進んだ。数回に及ぶ強化相の期間は入院していたため、学校の出席日数が不足していたが、治療中もよく勉強して成績はきわめて良く（400人中22番）、特例で進級となった。強化療法を終了し、外来通院による維持療法を行っていた。しかし、発病から1年7カ月後に再発したため、本人には再度骨髄の働きが落ちてきているためと説明し、治療に対する了解を得る。両親には再発であり予後は非常に厳しい旨を説明するも、できる限りの治療をめざした治療を両親は希望し、患児自らも頑張らなくてはと決意を新たにしていた。数回の寛解導入を試みるも反応は不良で、末梢血の回復に平行し芽球が増加して腰背部痛を訴えるようになった。この

頃の本児は、症状が改善しないため、看護婦に対して苛立ちの言葉を口にするようになるも、治療を受けて1日も早く完全に治りたいという思いが強く、不完全な状態での外泊は希望しなかった。また自分の病気については、医者ということはきちんと守っているのに、何故良くならないのかという事はあっても、病状について詳しい説明を求める事もなく、父母に対してもこの点に関してはほとんど口にする事はなかった。死亡する2カ月前より著しい腰背部痛のため、モルヒネ徐放剤を開始し、さらに痛み軽減の目的で再度化学療法を試みたが、骨髄抑制が強くほぼ終日39度以上の発熱が続いた。しかし、この間も患児の闘病意欲は強く、薬はできる限り内服し、体力をつけるために少しでもなにか食べたいという本人の意欲はあった。病状がさらに進行して、体力の低下と下肢の痺れ感のため体動も困難になると、それまで仕事のある父に遠慮していた患児は、患児に余計な心配をさせまいと病室に泊まることを控えていた父に、できるだけ一緒にいて欲しいと希望するようになった。身の回りのことをやってくれる看護婦に対しては、感謝の言葉を言うようになったが、受け持ちの研修医に対して唯一苛立ちを露にしていた。臨終の場で、父は患児の死を受容している様子であり、母は最後まで患児に対して「頑張れ」と声をかけていた。死亡確認後、病理解剖を求めると、両親は即座に承諾された。

『母親面接』

この様な経過の中で患児の母親、心理療法士、主治医、小児神経科医の話し合いが患児の臨終前日にもたれた。

a) これまでお子さんと接して感じてきたことは何ですか？

患児が病気になってからの2年間、彼という人間と初めて向かい合うことができたように思う。彼がどんな人なのか知ることができた。本当に我慢強く、努力家で他人の気持ちを思いやる子である。自分の事より私の事に気を使ってくれた。それにどんなに助けられたり慰められたか、そうした意味で素晴らしい貴重な2年間だった。

b) お子さんの病気について気になることはありますか？

いろいろ聞いたり詮索したりしても仕方がないことと思う。

c) お子さんとの関わりの中で心掛けたことは何ですか？

とにかく普段と変わらないように、それだけを思って彼に接してきた。これからもそうしたい。

d) 現在、お子さんにしてあげたい事は何ですか？

できればもう一度外泊して、皆とこの春卒業させてあげたい。この3年間、留年しないで頑張れたのだから。

e) 病院スタッフにこれまでにして欲しかったこと、これからの要望がありますか？
本当に感謝している。忙しいのにあれだけ時間をさいて、皆よくしてくれた。前

の病院で絶望的な気持ちでいたので、ここに移り救われた思いがした。

f) 心理面接を受ける事をどう受けとめていきますか？

いろいろ胸にためこんでしまうタイプの子でもないから、以前なら抵抗があったと思う。でも今なら受けてもいいと思う。

g) もっと早い時期での心理面接が必要でしたか？

私には必要ないと思う。

<母親面接を通して>

今回の母親面接は、臨終前日であったため、患児の生存中1回だけの機会だったが、とても多くのことを気付かせてくれたように思う。面接場面で母親は努めて感情を押さえようとしながらではあったが、いろいろ語ってくれた。入院当初より、患児は病気に対してあれこれ詮索するより医師を信頼し病気を治したいという強い意志が最後まであったようである。母親もその意志を感じて終始同じ思いで患児に接してきたことが強く感じられた。それを支えたのは、転院してから「救われた思い」と答えた母親の言葉に象徴される我々医療スタッフのキュアに対する親子の信頼の結果だと思う。しかし、心理面接に戸惑いはありながら、「今なら受けてもいいと思う」と答えた母親の気持ちは、患児がすでにケアを求めていることに気付いたためではないだろうか。この2年間、通常の母親のように成長する息子の背中を見て過ごしてきたのではなく、正面を向き合ってお互いのことを思い支

え合ってきたことは、親子関係というよりお互い一人の人間として甘えのない人格的な関係だったと思われる。だから、「彼がどんな人間なのか知ることができた」のであろう。ところが、母親は通院に片道2時間を費やし、お舅、夫、中学生の息子のいる家庭を支えながら、精一杯ぎりぎりのところで自分を支えてきたことも事実で、面接中理性的な対応をとることで最大の自己防衛をしていたのではないだろうか。

心理面接を受けることに対しては「いよいよターミナル・ケアかと思った」と母親には少々戸惑いがあったようである。ターミナル・ケアが十分でない多くの病院において「心理面接」の存在は遠いところにありそうである。患者あるいは家族にとって「心理面接を受けて下さい」という言葉は「これでもう医師から見はなされてしまった」という思いに陥るのではないか。医師側にもその言葉の中に「もう私達にはこれ以上何もできない」といった意味合いが含まれていないだろうか。患者側にも医師側にも「心理面接」とは、何か特別の人が、特別の場合に必要なものであるととらえているのかもしれない。チーム医療は、ターミナル・ケアにおいては特に必要とされている。キュアに導く手段はなくなっても患児とその家族が最後まで充実した時間を送ることをケアする手段はいくらでもあるからである。しかし、医療スタッフの過剰なまでの「忙しさ」の中にケアの存在は埋没されがちなのが現状である。

<今後の展開>

Death Educationの一環として、Grief Educationの重要性が唱えられている。重篤な患児をケアすることは、その両親、我々医療スタッフにとってきわめて心理的に困難で苦痛の多い仕事である。そこで、すでに子供の死を経験した両親と医療スタッフ（主治医、看護婦、心理療法士、小児神経科医）が、十分な時間を費やして、患児の発病当時から現在までの各々の立場における心理的プロセスをレトロスペクティブに検討し、その過程を通して共通の喪失体験から悲嘆への対応を学び、能動的に立ち向かうための知識と技術、そして新しい価値観の確立をめざしたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:白血病人の保護者と医療関係者が共通の喪失体験から悲嘆への対応を学び、今後の死への正しい理解を深めるために、発病時から臨終前日まで患児と接してきた母親と面接を行った。心理面接を受けることに対する母親の戸惑いが当初見られたが、傾聴していくうちに患児との内面的な繋がりがもてたことを語り続けてくれた。心理面接を通して保護者と医療関係者が身近な存在としてお互いを認識することが、患児の死への共通理解を深めるものと思われた。